

《夫・高田三郎を語る》

高田留奈子先生講話「この曲を書く人なら～はじめの頃のことなど」

2002年10月27日 東京・石橋メモリアルホール

東海メールクワイアー・高田三郎作品による東京演奏会 '02

今日(こんにち)、夫のちょうど3回忌、10月22日でしたが、それを記念して下さって、こうして東海メールクワイアーの方が東京で演奏会を計画して下さいました。

10年前に同じこのホールで、夫の曲だけでコンサートをして下さいまして、^{注1}その時は35人でいらしたそうですが、今日はその倍の70の方が、本当に心からの歌を歌って下さいまして、またこの会場も満員、超満員。皆さまがたくさん、夫の為に曲の為にいらして下さいまして本当に有難うございました。

プログラムを前もって送っていただきましたので読みましたところが、夫のこと、性格のこと、信念のこと、ぜんぶ皆さまが書いて下さって、私は何も、もう申し上げることがないような気がいたしました。が、ちょっと趣を変えまして、夫の一番はじめの頃の事をお話しようかと思ひます。実は今年の5月に、やはり東京で^{注2}夫の曲だけの合唱祭というのがございまして、その時は、私は夫がどうして作曲家になったか、そしてどのように一生を歩いたか、ということについてお話をいたしましたけれど、今日も多分、その時おいで下さった方もいらっしやると思ひますので、全く違う角度から話させていただきたいと思ひます。

夫の作品年表にも載っております^{注3}「山形民謡によるバラード」というオーケストラの曲がございしますが、これは夫が研究科(東京音楽学校・現東京芸大大学院)を卒業する時の卒業作品でもあったわけですが、これが第一作として夫の作品目録の「1」になっております。

そういたしましたところが、それは20代の終わりの頃なんです。夫がある時、銀座の楽譜屋へ行って、何か勉強の為にスコアを探していたところ、ベートーベンとかいろんな大作曲家のスコアと一緒に、自分の山形民謡の小さな黄色の表紙のスコアでしたけれども、それが一緒に楽譜棚に並んでいたのを見て、ビックリして「えっ、こんなところに僕の曲があるのか」と思って、心臓がドキドキして、思わずその店から逃げ出して、それ以後はその店へは二度と行かなかった(場内爆笑)と、^{注4}夫の随想集に自分で書いております。

夫は中学の時、はじめて^{注5}ベートーベンの“第5シンフォニー”を聴いた時に、「こういう曲を書きたいなあ」と思ったのがそもそもの夢のはじまりだったそうですが、そのベートーベンと並んで楽譜棚にあったので本当に驚いた、という事でございしますが....その曲が実は、私との出会いにもなった曲でございます。

私は、その一、^{注6}最初の演奏会の時に、夫が、「聴きにきてくれ」と言ったのですけれど、私は、まさかそんな意味だとは思わないで行ったのです。ところがその曲を聴いていたら....もう、この曲を書く人ならいいな、という気になって(場内爆笑、拍手も....)、私は一生、(Fu...)夫のことはまだあまり知らなかったのですけれども、一生私はどうも、夫と結婚しているというよりも、その曲と結婚して(場内再び爆笑)一生活たんじゃなくかと思ひます。

でも、いま思ひましても、その曲には夫のすべてがこめられている、夫の遺影を見てもその曲のものがすべて入っているような、そういう曲でございます。

まあ、そういうわけで、もうひとつ若い時の思い出を申しますと、^{注7} 私達は2回、東京で空襲に遇いました。そして何も持たないで信州の大屋から、その頃 “丸子線” という電車が走っておりましたけれども、そういう本当の^{注8} 田舎に疎開いたしました。

すべてを失ってしまった私達、まだ子供もおりませんでしたので、もう二人の一致することは音楽だけ、その美しい自然の中で夫は^{注9} 色々とスケッチを書き溜めておりましたが、それが戦後、東京へ来て、^{注10} お寺の間（ひとま）暮しを始めたところで、二人の共同作業で「ピアノのための前奏曲集」というのを書きました。それが、私がいま思いますが、二人が最も近く理解しあい、連れ添えた、何もほかにない、仕事もない、ただ作曲だけしかなかった時代、今も大変それを懐しく思っております。

夫は50歳くらいから、今日演奏していただける「わたしの願い」、「水のいのち」など合唱曲、ことばによって、そのことばに自分の思想や意思を共鳴させて作曲していくような傾向にだんだんまいりましたけれども、30代から40代は主に器楽曲を書いておりました。で、その頃の作品でも自分の思想とか考えが十分に表現出来ない曲は全部、作品表から抹殺しております、ごくわずかですけれども、これは、というのが残りました。

そして実は、大変、あの—そういう曲はCDにしても、なかなか売れないという事だったのですけれども、ビクターが採算を度外視して、^{注11} 器楽曲の重要作品をすべてCDにして下さって、それが丁度この21日に発売ということになりまして、私にとりましては私の最も深い思い出がある曲がそこでひとつ、皆様にもお聴きいただけるということを本当に嬉しく思っております。

ま、それでちょっと前置きが長くなりましたけれども、そのあと夫は8年かかって^{注12} 宮澤賢治の「無声慟哭」という曲を書きました。それで、それを書きながら「これを書きながら死んでもいい」と思う曲しか書く気がしなくなった、と申しておりました。

その頃から合唱作品が始まりましたので「わたしの願い」、「水のいのち」、「心の四季」、今日演奏して下さるこれらの曲が生まれた訳でございます。その20代のおわりに初めてスコアが出版された時、まさか「水のいのち」が200版を超えるような売れ行きになるという事など、夫も私も夢にも思った事がございませんでした。夫はただ、名誉のためとかお金のためには一曲も書きませんでした。

また、ひとつ、皆様に多分、夫も申し上げていないと思うことがあるのですが...東京オリンピックの時のテーマ音楽を、実は委嘱されたのですが、夫はそういう曲はいくらお金をくれても絶対に書かない、と言って固くお断りして、^{注13} 別の方がお書きになりました。夫はただ自分の言いたい事、願いが伝わるような曲しか、一生書いてまいりませんでした。そして晩年になって、ちょうど日本のカトリック教会の典礼が、今までラテン語だったのが^{注14} 日本語でもよい、という事になった時に、その仕事を夫に任された訳でございますが、夫はそれを神様から名指しで頼まれたという風にとりまして、それ以後は、神のことばを作曲するという事は大変なこと、ひとつでも音を選び損ったら神様のみ旨がその通りに伝わらない...。それくらいの...本当に祈り、聖書を読み、毎日個室で修道生活のように祈りながら書き進めて行った訳でございます。そして、それが220曲ございます。それらは全部、神様へのご奉仕として行った訳でございます。そして夫は、日本に、神様の本当の意味の正義、平和、愛、そういうものが来ますように、皆さんが聖書をもっと親しく読んで下さるように自分の音楽を聴いて欲しいと、晩年しきりにそれを申しておりました。

最後に、亡くなるちょっと前に私を呼びまして「僕は一所懸命、一生したつもりだったけれども、いま思うと、何もしていなかったような気がする」と言って大変悩んだ顔をしておりました。けれども夫は最期の最後、息をひきとるまで、典礼聖歌をテープでかけますと、自分で指揮をしたり、また祈った

りと、もう、息をひきとるまでそういう風に、神様からのご指名に応えようとして逝った訳でございます。

そして、それだけ書いた作品は楽譜のままでもありましたら、何もお伝えすることが出来ませんが、東海メールクワイアーが、それをこのように、編曲もなさり、出版もなさり、また名古屋でも、東京でも、こうして高田三郎の一日の音楽会をして下さいます。また、男声合唱の典礼聖歌、これから歌って下さいますが、これは何か、本当に、夫と東海メールとの、どこか魂のふれあいの一点があるかのように、東海メールクワイアーはこの典礼聖歌を、日本列島を縦断してあちこちで歌いたいと、いま燃えていらっしゃいます。ですから、夫の“わたしの願い”は本当に叶いました。そして最後に歌って下さる「わたしの願い」のように、皆さんと共に高きものの名を呼び求めつつ、今日もきっと、この会場に魂を、この辺かどこかにおりまして、一緒に皆さんと高い名を呼びながら、祈りながら、皆さんと共にこの会を終らせて頂けるのではないかと思います。

本当に皆さま、有難うございました。（場内、拍手に満つ）

監 修 高田留奈子
2009年3月20日録音記録より書き起し 片山 和弘
（東海メールクワイアー）

高田留奈子先生講話『この曲を書く人なら』 注釈

注1.(その時は35人で)

1992年5月、創立45周年記念東京演奏会・高田三郎指揮による男声典礼聖歌初演。
正確には39名、因みに当時の在団者は41名。

注2.(夫の曲だけの合唱祭)

北トピア合唱フェスティバル「作曲家個展シリーズ Vol.3 高田三郎」

注3.(山形民謡によるバラード)

東京音楽学校研究科終了作品に、山形県のある地方に伝わる独特の節回しを持つ子守唄を主題とする管弦楽曲を書くことに決め、食事の時間も忘れ、ピアノの椅子から落ちてそのまま眠ってしまう程、根をつめて作曲に打ち込む。1楽章をファンタジー、2楽章を研究科最後のレッスン(フェルマー教授)であったフーガ形式によることにした。

フェルマー教授指揮(東京音楽学校学生オーケストラ)による初演(1941年11月)前のある日、教授の指示で作品の通しリハーサルを、ひとり客席で聴いた時、最初の音が鳴りだした瞬間、目から涙があふれてとまらず、最後までうつむいたまま聴いていた。「私が初めて私自身に会うことができた時」だった。

作品は、ローゼンシュトック、斉藤秀雄、レオニード・クロイツァー、外山雄三、渡辺暁雄、芥川也寸志他著名指揮者によってN響、東京フィルなどで日本各地はもとより、海外でも度々演奏された。

また、弦楽四重奏、弦楽合奏、パイプオルガンにも編曲され、やはり、海外でもしばしば演奏されてきた。

注4.(夫の随想集に)

『来し方』(音楽之友社発行1996年12月)山形民謡によるバラード(二)の項

注5.(ベートーベンの“第5シンフォニー”を聴いたときに)

旧・愛知一中時代、ある友人と自分の持っているレコードでベートーベンの全ての交響曲と協奏曲、器楽曲を聴き、その音楽に惹きこまれていった。

随想集に『子供の頃から青春へかけての様々な“なぜ?”にベートーベンの交響曲の楽章のいくつかは確かに答えてくれ、暗闇の中に輝き出した希望の光のように私を照らし温めてくれた』とあり、そして『できたら私も作曲を生涯の仕事にして日本人たちに答えられる曲を作りたいと強く思うようになっていった』と、音楽への傾倒ぶりの中にも志の高さがみられる。さらにこれらの体験から『生演奏にしるレコードにしる聴きたいと望んだ演奏を、聴きたい時間に、音楽に心をゆだねきって聴きいる...ただ楽しいだけ、愉快なだけ、うきうきするだけのものではない。音楽は、私にとっては心を集中し全身全霊を傾けてひたすら聴くもの』と、高田三郎にとっての音楽感が中学生の瑞々しい感性の中で形成されていったのである。

注6.(最初の演奏会の時に)

「山形民謡によるバラード」が恩師ヘルムート・フェルマー教授の指揮(東京音楽学校学生オーケストラ)で初演された翌年1942年12月(共立講堂)、高田三郎自身の指揮で再演することになり、そこに研究科でピアノを学んでいた2級下の女子学生・森留奈子を招待した。

歌曲「風のうたった歌」全3曲(オケ伴)初演をも行ったこの演奏会はプロ指揮者としてのデビューでもあり、その後、作曲に専念すべくプロ指揮者活動を断念(1952年8月)するまでの間にN響、日本フィルなど著名オーケストラを指揮、NHKラジオからもかなり多くのクラシック番組が放送された。

二人は1943年10月に結婚。めでたく金婚式を迎えた1993年3月、二人を結びつけたオーケストラ曲は初演から52年を経て「中学生の音楽鑑賞」(ビクター)に組み込まれてCD発売され、更には高田三郎80歳の祝いと、二重、三重の喜びにまつまれたのである。

注7.(私達は2回、東京で空襲に遭いました)

1945年4月(市ヶ谷)、5月(赤堤)。家具も楽譜も書籍もすべて失う。

注8.(田舎に疎開)

長野県小県郡長瀬村(現、上田市長瀬)

注9.(色々スケッチを書き溜めて)

優しく心あたたかい人達と千曲川の支流、依田川が流れ、季節が美しく移ろい行く自然に心慰められながら、画家がスケッチブックを持って風景を描くように、五線紙ノートに音のスケッチを始めた。

『来し方』ピアノのための前奏曲集(1)の項で、『唯ただこのスケッチにすべてを懸けて毎日を生きた』と回想している。

注10.(お寺の一間暮し)

1945年12月から東京、品川にある東海寺寺中、春雨庵の離れに住まわせてもらい、そこで、長瀬村で書き溜めたスケッチを留奈子夫人の協力(出来あがったフレーズを何度も弾いてもらって、それが音楽になっているかどうかを確かめた)を得ながら『ピアノのための前奏曲集』(全5曲、1.蒼き沼にて 2.風に踊る日の光 3.山鳩 4.藍色の谿間 5.暮れ行く山々)にまとめあげる。

初演は1948年6月(毎日ホール)留奈子夫人が行った。

「この仕事は私の生きている証であった」と、その時の様子は『来し方』ピアノのための前奏曲集(2)の項に詳しい。

注 11. (器楽曲の重要作品をすべてCDに)

2002年5月11日、カザルスホールで開かれた“高田三郎室内楽作品のすべて”をビクターがライブ録音。「高田三郎器楽作品集」(CD2枚組)として同年10月に発売。

1. ヴァイオリンとピアノのための奏鳴曲
2. チェロとピアノのための奏鳴曲
3. “マリオネット”弦楽四重奏のための組曲：全6曲
4. ピアノのための前奏曲集・全5曲
5. ピアノのための五つの民俗旋律・全5曲
6. ピアノのための前奏曲(森留奈子嬢に捧ぐ)

注 12. (宮澤賢治の無声慟哭)

ソプラノ、バリトン、ナレタ、合唱と管弦楽のための宮澤賢治の詩による《無声慟哭》、日本フィルハーモニーが委嘱、渡辺暁雄指揮で初演(1964年3月、東京文化会館大ホール)賢治の最も良き理解者であった妹・トシ。「肉親の死を悼んだ詩の最高峰のひとつに数えられる、いわば一見難解とも考えられそうな詩。しかし、想いの大きさ深さがこれだけのことばを必要とした詩。しかも、みずからの真実へのあの率直さを持った詩。この詩が音楽から忘れられてなるものか」との強固な想いは、死と向かい合ったいつ果てるとも知れぬ時間の連続、実に8年の歳月を経て全5楽章からなるカンタータに結実した。第1楽章・永訣の朝、第2楽章・松の針、第3楽章・無声慟哭、第4楽章・風林、第5楽章・白い鳥 総譜(英訳付)出版、1995年1月・音楽之友社。同時にフォンテック社より初演のカセットテープ発売。

そして「死はもはや恐ろしいものでも、嫌なものでも特別なものでもなく、むしろ親しみ深いもの」となり、作品によってその心を鍛えられた作曲家・高田三郎は、目覚めと同時に始まる輝く時間の中で今度は猛然と、「わたしの願い」「水のいのち」「心の四季」などの“生きる”音楽、“生”を問う音楽を生みだしていったのである。

「作家が作品の結果である！」と特別の想いを寄せる作品「無声慟哭」を、高田三郎は、初演から31年を経た1995年7月、豊中混声合唱団第35回定期演奏会で、初めて指揮した。願いながらも叶わなかった夢の実現は正に作曲家冥利、至福の喜びであったらう。

注 13. (別の方がお書きになりました。)

黛敏郎

注 14. (日本語でしてもよい)

典礼刷新運動は「典礼憲章」発布(1963年12月)により本格的なものとなり、1964年4月に「典礼全国委員会」が設置されて典礼書の日本語訳が始まった。そして1967年5月、高田三郎は教会音楽常任委員に任命され、司教団からの指名を受けて日本語の典礼音楽を作曲することになり、生涯に220曲の典礼聖歌を遺したのである。

1992年1月、時のローマ法王ヨハネ・パウロ2世は「聖シルベストロ騎士団長勲章」を授与してその功績を称え、高田三郎の宗教音楽の作品及び資料は全て、バチカンの資料館に収蔵、保存されている。

文責：片山和弘